

一栄谷の 私見 異見



農業改革、農協改革で日本の農業と協同組合は窮地に追い込まれつつあるが、併行して安倍法制に続いて安倍政権は憲法改正をうかがうなど我が国の平和は確実に脅かされつつある。

こうして折、9月25日に上田市の交遊文化芸術センターで窪島誠一郎の詩、池辺晋一郎の作曲による唄書合唱組曲「こわしてはいけない」無言館をうたうこのコンサートが開催され、けつこうな反響を呼んでいる。

無言館は上田市であり、立原道造を含めた若くして病死した画家のデッサンを展示する窪島氏の私設美術館・信濃デッサン館の分館として97年に造られたもので、戦没した画学生の感霊を掲げている。窪島氏は全国各地の遺族の家々を訪ね歩き、戦死した画学生が「二十点、三十点……とあつまりはじめたとき、そのあいたから地をゆすぶるような声がかこえてきたのだ。それは『もつと描きたい』『もつと生きたい』という若者たちの切実な『生』への飢えだった。」これが無言館の設立に向かわせることになった。

ちなみに窪島氏は作家・水上勉の息子で47年の生まれ。水上は東京大空襲で息子は焼死したばかり思っているが、窪島氏35歳の時に親子は対面することになる。この窪島氏が「戦争のあの惨禍を二度と繰り返さない」という口先と真腹に、戦争できる態勢に变身しようとしている「動きを憂いてこれぞなもの」

というタイトルでも篇の詩を書いたもので、日本国憲法、なかなしく第9条を守っていくことを訴えている。このコンサートは無言館が開館して20周年の記念事業の一環として行われたが、主催は長野県つたごえ協議会で、平和運動「つたごえ運動」を展開する本協議会が県内各地の合唱関係者に呼びかけ、200名を超える人た

ちが一室に会して歌い上げたものだ。この合唱には『無言館』にはらら画学生たちの声も加わっていると思っただ。胸を張り、爪先をたたく、喉をふるわせ、まっすぐに（指揮者の）池辺さんをつめて歌う人々のあいだに、戦場で傷ついたらまの姿で声を合わせる若き画学生たちがまじっていた。画学生も歌っていた。」と窪島氏が語っているようにきわめて感動的な舞台となったようだ。ここで留意しておくべきは、本協議会に参加するメンバーはそれぞれに日常的に地道な活動を積み上げてきており、これがベースとなつて今回のコンサートの実現につながったことである。その一つ、伊那市の「つたごえネットワークきぎむし」は毎年8月上旬の日曜日に「平和音楽祭」を開催しており、今年で7回目となった。メインは長崎の原爆で被爆した渡辺手恵子さんの体験談を、合唱と語りで構成する「平和の旅へ」の演奏であり、これに地元を中心に個人やグループによる別途の多様な演奏が加わる。今、農業改革、農協改革に異論をさしはさむことさえはかれる雰囲気だ。守るべきものを明確にし、地域農業振興への取組み、小さな協同の積重ね等の地域での着実な実践からこそ、大きなねりを作り出していくことが可能になることを肝に銘じておきたい。（農的社会サイエンス研究所代表）

「こわしてはいけない」